

## 図書館の徹底活用術⑱

図書館利用者の学習主体形成と図書館を巡る試考察  
広岡亮蔵の学力モデルとその構造になぞらえて

枝元 益祐

皆さんの学習支援の為に、図書館サービスの有用な活用方策についての近接領域を毎回紹介しています。今回は、ネイザン・グレイザー (Nathan Glazer) が提唱する専門家、或いは、専門職の専門性形成に着眼しました。その際、「学習された専門性」という概念で、その特性から手続きが明示的な「メジャーな専門性」と流動的且つ可変的な「マイナーな専門性」とに分けて考察しました。

上記の2つの専門性の捉え方を踏まえて、図書館や教育、福祉分野などに求められるマイナーな専門性には「変わり易い曖昧な目的に悩まされ、実践では不安定な制度的文脈に煩わされている」という性質があることを指摘しました。従って、その手続きが客観的で専門教育や研修などのような教育計画によって「学習された専門性」ではなく、実践活動という社会的文脈や状況に埋め込まれた学習により形成される専門性であるというのが図書館のサービスにもその利用者にも共通して指摘できる性質であると云えます。このことは、J.デューイ (Dewey, J) の『思考の方法 (How We Think)』(1910) で提示された「反省的思考 (reflective thinking)」や、ドナルド・ショーン (Donald A. Schön) の「反省的实践者 (reflective practitioner)」という概念で強調された実践活動や経験、行為、省察、対話などからの知の生成を下敷きにして、実践活動という社会的文脈や状況に埋め込まれた学習により形成される専門性を上書きすることによってより鮮明に浮き彫りになります。



広岡亮蔵「学力、基礎学力とはなにか：高い学力、生きた学力」『現代教育科学』1964年2月臨時増刊号、1964、pp.5-32、p.24.

また日本に於ける戦後の学力論に大きな貢献をした広岡亮蔵は、教育課題としての学力観のモデルを、「高い科学的な学力を、しかも生きた発展的な学力」という形態で具現化すると共に、「知識層」(外層と中層に分化)と「態度層」の二層で学力を構造化して捉え、知識層を支えるものとして態度層を位置付ける学力モデルを左図のように提起しています。

この広岡亮蔵の学力モデルは、学習者を取り巻く環境との関係性の中から態度や知識が生成するとした点にその特徴があり、この学力観の中核には「感受表現態度」とそれを支える「操作的な態度」、及び、「思考態度」があります。これらが二層化された内の「態度層」を構成するが、換言すると、経験や内面的な学習ニーズの存在を前提としているということが出来ます。これと関連する形態で「態度層」の外側に技術と知識などによって構成される「知識層」が指定されています。そしてこの構造は、学習者のみならず、多くの教師が持っている内面的な問題意識に応え、伝達可能な知識やスキルのみならず、傾注しない学力観を提示することになります。

上記のように経験を通じた学習などに端的に現れるような内面的な精神力動としての主体的な学びの在り方に共通していることは、生活活動の中に位置付けられた学力、或いは、能力、専門性であるということです。こういった内面的な態度や認識の在り方への眼差しは、いずれも戦後教育改革の潮流であった経験主義教育の影響があると考えられます。換言すると、知識伝達型教育モデルでのアプローチとは異なる学力観が提示されているということが出来るのです。このことは学習者を「白紙」の状態と見做し、故に、如何に合理的に知識を伝達するのかという教授法研究の潮流とは異なった学力観へのアプローチとして捉える必要があります。

今回は、この流れを踏まえて現代的な主体形成と学力及び、それらを基にした図書館利用に関して考察を深めて行きたいと思います。

えだもと ますひろ (准教授・図書館学・教育学)